

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.37 No.5
2013.9.1
会報 (通巻 221 号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



World Publishing Expo 2013の見どころ

日本新聞協会 技術コンサルタント
三宅 順

WAN-IFRAは毎年秋、新聞業界にとって重要な世界的なイベントを主催している。それがWorld Newspaper Congress and World Editors ForumとWorld Publishing Expo (WPE)だ。WAN-IFRAは仏のパリと独のダルムシュタットに本部、シンガポールとインドに支部を置き、世界の新聞社やニュース発行社のための世界的な組織



である。WAN-IFRAには1万8千を超える新聞、1万5千のオンラインサイト、世界120か国以上の国から3千社が加盟している。その中核となる使命は報道の自由、高品質のジャーナリズムおよび編集倫理を守り、新聞業界の繁栄を促進することだ。

今年、ベルリンで開催されるWPEは名前を変えて2回目の開催となる。昨年のWPEを見ると名称の変更に象徴されるように、Expoの内容はニュース発信の多様化・デジタル化に合わせて質的に大きく変わろうとし

目次

World Publishing Expo 2013の見どころ

新局長に就任して

日本新聞協会 技術コンサルタント **三宅 順** 2

沖縄タイムス社 システム局長 **田口 雅士** 5

中日新聞東京本社 技術局長 **杉本 雅昭** 6

中日新聞北陸本社 技術局長 **榎本 衆** 7

福島民友新聞社 取締役電算編制局長メディア担当 **礪波 道夫** 8

読売新聞大阪本社 執行役員制作局長 **植松 実** 9

南日本新聞社 印刷局長 **中村 正** 10

(株)コスグラフィックシステムズジャパン 営業部長 **中村 英之** 11

DIC グラフィックス(株)、(株)東京機械製作所 12

岡本化学工業(株)、(株)ニコン 13

楽事万歳

日本新聞製作技術懇話会 会長 **芝 則之** 14

日本新聞協会 顧問 **鳥居 元吉** 15

(株)インテック NSG 事業部メディアソリューションセンター 営業部長 **林 克美** 16

会員社リポート

原前会長を悼む

第37回国内研修会記他 17

●表紙写真提供：「CONPT TOUR2012 入選作より」

第一工業(株)・中島 悠希氏

「ドイツの新聞スタンド」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

ている。

WAN-IFRAのVincent Peyrègne CEOは次のように述べる。「WAN-IFRAの基本的な使命は常に、技術革新者とメディアの専門家を結び付け、新聞業界の変革を支援することだ」。WPEのオープニングスピーチを行う、独アクセル・シュプリングのMathias Döpfner CEOは、新聞業界の将来に関し楽観的に次のように述べている。「(これからの)デジタルの時代は、ジャーナリズムにとって黄金時代となるあらゆるチャンスを提供する」。また、カナダのグローブ・アンド・メールのPhillip Crawley発行者兼CEOは、印刷も力強い段階へと動き出しており、WPEの価値について次のように言う。「この展示会は世界中から非常に多くの多様な意見を集め、実際にたくさんの他の国や場所での意見を聞くことができ、われわれは多くを学ぶことができるだろう」

《WPE 2013の注目テーマ》



今年のWPEの見どころについて、8月中旬の時点では出展各社からの具体的な発表がほとんどないため、昨年のExpoやdrupaの展示内容を参考にして、その方向性を予測するより方法がない。

まず、昨年までの最近の展示内容の傾向について振り返ってみると、一言で言えば「新聞社の収益向上に貢献できる新システム・技術」を紹介しようとし、その中でも重要な解決策の一つである「上下流部門の新デジタル技術」が中心であったように見受けられる。それは多くの『新聞』に代わる新たなデジタル情報発信やデジタル印刷技術の展示や紹介に見られたと思う。

現在の新聞業界のおかれた状況を考えると、上流部門においては効率の良いマルチメディア対応、コストをかけずにサービスの多様化に対応することなどのデジタル技術が求められており、下流部門では新聞印刷による収益の改善、その対策の一つとしてのデジタル印刷や既設機の生産性向上対策などが注目を集めている。いずれにしても一つの方向性はモバイル端末、タブレット、PCなどへのオンラインニュース提供のためのソフト・ハードの新技術であり、もう一つは販売・広告の収入が激減している新聞(紙)ビジネス再構築のための新印刷技術・改良技術であろう。

これらの新技術・新製品は、当然のことながら以前のものよりも費用対効果の高いもの、コスト削減につながるもの、さらなる省力化が可能で効率の良いもの、既存設備の延命化、新たな収入が期待されるもの、品質向上に寄与するもの、環境問題に的確に対応しているものなどが求められていると考えられる。

①費用対効果の追求

下流部門で顕著に見られるが、各社に共通した新輪転機に対する考え方は従来機に比べ初期投資のコストは低く性能はアップしたものだ。この傾向は今年も見られるだろう。こうしたコスト意識に徹した考え方は上流部門でも続くことだろう。新聞各社の規模やニーズに合わせた新システムの提案には注目をしたい。

②省力化技術への期待

新聞社の経営状況が良くない中で、各社は収益改善のために新規事業への進出を進めると同時に、社内の組織や人員のリストラを続けている。こうした動きに対応して、上流部門では社内組織の再検討と合わせて少ない人員で効率的に情報発信のできるハード・ソフトウェアのプラットフォームのニーズが高まり、下流部門では輪転機の機付き人員の削減につながる技術や発送部門の新たな付加価値

を付けられる技術・製品が注目を集めることだろう。

③新たな収入源

情報発信サービスの多様化、つまり脱『新聞』あるいは『新聞』との併存の動きの根底にあるのは、新聞社の生き残りをかけた経営問題への戦いだろう。その解決策の一つが複数の端末へのオンラインニュース発信であり、新聞のデジタル印刷だと考えられる。この分野では新たな収入源につながると期待される多くの新技術の発表が予想される。

④その他

他にもコスト削減・印刷品質向上の技術・環境問題対策技術も着実に進歩し、新たな提案が引き続きなされるものと思われる。

さて、少々気が早いが来年のExpo開催についても発表があった。開催地はオランダのアムステルダム(RAI exhibition centre)、2014年10月13日から15日の3日間開催されるという。

《追加の見学先情報》

最後に、前号の発行段階ではCONPT-TOURの訪問先が未確定だった英国の2社についても確定したので若干触れておきたい。英国ではロンドンの新聞発行人News UK (旧 News International) と、ロンドン郊外でその新聞を印刷するNewsprinters社の世界最

大規模を誇るBroxbourne印刷工場も見学できることになった。

新聞発行人News UKについては既に前号で紹介しているので割愛する。

Newsprinters社は英国内に3工場を有し、そのうちの 하나가ロンドン近郊Broxbourneにある印刷工場だ。同工場は世界最大の印刷工場(敷地面積8.73万㎡、従業員数約500人)で、以前はロンドンの東Wappingにあった工場を2007年に閉鎖し、3億5千万ポンドの投資により最新鋭の工場として建設された。ここではNews UKが発行するタイムズ、ザ・サンのほかデーリー・テレグラフやサンデー・テレグラフなども受託印刷している。印刷設備のマンローランドのトリプルワイド機Colorman XXL 12セットをはじめ、最新の生産設備が導入されている。(同工場の詳細については「新聞技術情報」2011.10.25号を参照)



Newsprinters社Broxbourne印刷工場全景

CONPT TOUR 2013 日程

月 日	地 名	訪 問 先
10月 6日(日)	東京(成田)発 ベルリン着	
10月 7日(月)	ベルリン	午前 IFRA セミナー 午後 World Publishing Expo 見学
10月 8日(火)	ベルリン	午後 アクセルシュプリングー・シュパンダウ工場見学 午後 アクセルシュプリングー・本社見学
10月 9日(水)	ベルリン → ロンドン	午後 Stroma 社見学
10月10日(木)	ロンドン	午前 ニューズ UK 工場 見学 午後 ニューズ UK 本社 見学 夕刻 研修会 夕刻 さよならパーティー
10月11日(金)	ロンドン	直行便にて成田へ
10月12日(土)		到着後流れ解散

新局長に就任して

ゆいレールのように？

沖縄タイムス社 システム局長

田口 雅士

那覇空港から(首里城のある)首里まで走るモノレール、通称「ゆいレール」は2003年(平成15)8月10日が開業日。2両編成のワンマン運転で定員165人。約13キロ(15駅)を30分ほどで結ぶ。



最高時速は65キロだそうだが、駅間の距離が短いこともあるのか、平均時速は28キロとホームページにあった。あくまで、いかにも沖縄らしい「ゆっくり」「ゆったり」とした時間の流れと車窓からの眺めが楽しい。

10周年記念のイベントが催された会場の最寄り駅名は「県庁前」。文字通り、県庁はじめ那覇市役所、観光名所の「国際通り」にも近い。そのホームの目と鼻の先に、弊社新社屋も建つ。

もともと社屋は同地にあったのだが、老朽化。返還された米軍用地跡を開発した「那覇新都心地区」のビルに、02年に入居した。10年間を過ごし、創刊65周年の節目を控えた12年12月、再び戻ってきた格好だ。

* * *

実は新聞制作システムを14年ぶりに全面刷新する作業が続いていた。そこへ重なった移転業務。社内ネットワークの構築もあり「ただでさえ社屋移転は大変な作業。現場はハードワークの連続だった」と東京支社から帰任後、前任者から聞かされた。

導入したのはNECの「NEPCEL」。記事・写真の出稿から組版、アーカイブまでの機能が連携し、より効果的な新聞制作が可能になった。文字はユニバーサルデザインフォント

を採用、視認性を高めた。

データベースの充実も並行して進め、12年7月には紙面検索システムを完成させた。1948年7月1日の創刊号から96年12月31日までの全紙面・全記事をデジタル化。キーワード、または日付指定で過去記事を検索し、日々の取材や業務に役立てている。

ちなみに弊紙には、創刊直前の6月29、30の両日に「号外」を発行するという特異な歴史がある。

戦後の第3次通貨切替を伝えるもので、29日付は「通貨切替断行さる」「交換期間7月16日-20日まで」「悪性インフレに終止符」といった見出しが並ぶ。併せて「創刊号発行に先立ち(中略)通貨切替の重要性に鑑み本号外を発行しました」との社告を掲載した。コピーで読み返すガリ版刷りの紙面が、先輩たちの意気込みや情熱、そして住民視点での報道こそーという理念を今に伝えてくれる(30日付は前日のそれに誤訳があったことによる)。

なお、97年以降の全記事はテキストデータとして保存。2000年からはPDF化も進めてきた。

* * *

システム局は2011年7月発足と、比較的新しい組織。前身はメディアシステム本部(システム部、メディア部)で、編集局編制本部の制作部と画像部を統合した。システム部、制作画像部、さらに12年7月に設けたコンテンツ部の3部で構成する。

当面のテーマは、コンテンツ系をどう充実させていくかーということになるだろうか。割り付け用紙と鉛筆と倍尺(ばいじゃく)を手で整理していた旧社屋時代を、懐かしんでもういられない。専門用語との悪戦苦闘も続く。

とはいえ、生来の「のんびり屋」。気は焦るものの、ゆいレールのように「ゆったり」走ろうと思っているのだが、さて。

音階に学ぶ

中日新聞東京本社 技術局長

杉本 雅昭

大学時代にアマチュアのオーケストラに参加していた。今でも機会があればクラシックを聴きに行くが、年に1回行ければ多い方。そんな乏しい機会の中でも、ごくまれに、鳥肌が立つような美しい和音を耳にすることがある。大抵は弦楽器だけで演奏される場面で、和音はこういうものかと、感じさせる美しい響きに感動する。ピアノのやや硬めの和音とは異なるその響きが気になって、大学を卒業してしばらくした頃に音楽の理論などとは無縁だった私が、調べたことがある。



* * *

楽器の音は空気や弦などを振動させ、それを耳に伝える。振動するものの長さで、振動する速さ、つまり音の高さは変わる。短いものは高い音、長いものは低い音になり低音の楽器ほど図体が大きくなる。楽器の弦などが振動すると決まった高さの音だけでなく、2倍、3倍、4倍・・・といった高さの自然の倍音が同時に生まれる。この倍音だけを同時に鳴らすのが和音の始まり。自然に含まれる音同士を組み合わせるのだから当然きれいに響く。ドミソの和音は、このような音の組み合わせで表現できるが、今の音楽で使われている音階では完璧に響く和音は表現できない。ごくまれに耳にするオーケストラの美しい和音はそのような響きをプロの感性で表現しているのだろうと勝手に想像している。

オーケストラではラの音が基準として使われ、440ヘルツのラを基に音を合わせる人が多い。この音で自然倍音を組み合わせると、ラ、ド#、ミでそれぞれの周波数は440ヘルツ、550ヘルツ、660ヘルツで、4対5対6の周波数

比になる。調は違うが、いわゆるドミソの和音に相当する。このように倍音の音の系列で作られる音階は純正律と呼ばれる。この音階、響きは美しいが大きな欠点がある。違う調の音階が表現できないため、この例だとラから始まる音階しか表現できず、調を変えるには楽器の音の高さをチューニングしなおさなければならない。調がどんどん変わったり、複雑な和音を使うような現代の普通の曲には使えない。そこでいろいろな音楽を表現できるように考えだされたのが平均律という音階。1オクターブは周波数比2倍として倍音の関係を維持しながら、その間を12に分割する。基本になる音の周波数をA、分割される音の順番をNとすると、Aかける2の12分のN乗という計算になる。先ほどのラ、ド#、ミが440ヘルツ、554.36ヘルツ、659.25ヘルツとなり、4対5対6とは微妙にずれるため完璧な響きにはならない。しかし、全ての調の音階をチューニングしなおすことなく表現でき、複雑な曲や和音が演奏できるようになった。機性能性が画期的に向上した。すばらしい発明だった。

* * *

この音階ができるまで、さまざまな議論や試行があったと思う。最も美しい響きを手放し、機能的な表現力を持つ平均律を選ぶことは、響きと言う理想を求める人たちには耐えがたいものであったに違いない。でも今の音楽の発展は平均律なくして考えられない。その方向は自然な流れだったし、正しい選択だった。

私たちの業務は、理想を求めつつ、現実的な選択をしなければならないことが多い。どう進めるのか考える時に、平均律のことをよく思い出す。視野を広くして柔軟に構えることの大切さを先人の知恵は教えている。そういうことを意識しながら、時代の変わり目の新米局長として、できることをひとつひとつ進めていければと思う。よろしくお願ひします。

発想の転換と総合力で

中日新聞北陸本社 技術局長

榎本 衆

金沢の中心街から大通りを一本入ると、入り組んだ路地と古くからの街並みが残る。目的地へ向かうつもりが、いつの間にか違う方向を向いていたり、行き止まりだったりする。加賀百万石の城下町として、外敵が侵入しても容易に城の本丸には近づけない仕掛けがしてあるのだろう。難攻不落の街、である。



* * *

6月末に、金沢にあり石川・富山両県を発行エリアとする中日新聞北陸本社の技術局長に就任した。入社以来30年以上、編集局の整理畑で仕事をしてきた。技術部門と関わることは多く、「話ができる」方だとの自負はあったが、システムや印刷などを本当に理解しているか、と問われるとかなり怪しい。そんな素人ではあるが、周りに支えられて、入り組んだ路地へそろりと一歩を踏み出したといったところだ。

技術畑への移籍を異国に降り立ったかのように語る人もいる。いわく「用語が違う」「発想が違う」「文化が違う」。確かに首肯するところはある。しかし、たとえば部数が輪転機的能力で規定されるようにハードの制約を受ける部門である。加えてIT化で社内のデジタルデバイスも進む。発想や用語が違うのは当然とも言える。重要なのはそこで思考停止せず、常識を疑ってみることだろう。

違いを踏まえた上で制作部門の使命はと問われれば、まずは安定稼働だろう。トラブルなく紙面をつくる続けること。毎日定時に新聞が読者に届けなくてはならない。トラブルは「なくて当たり前」なのだ。機械が相手なの

で日常の整備も重要だ。システムのトラブルも突き詰めるとヒューマンエラーだったりする。状況を素早く把握して次善の策を考える即応能力も求められる。

経費節減も同様に大きな使命だ。どの部門でも求められていることではあるが、編集しかも内勤部門にいた身からすると資材にかかる経費は膨大だ。ケタが二つも三つも違う。少しでも減らす知恵と工夫が必要だろう。

制作部門は高度な技術者集団であり、大量のデータをスピーディーに紙面化し、短時間で印刷する。今や当然のことだが、それを実現するために日夜奮闘している。

これにコスト意識をどう浸透させていくか。ヒト・モノ・カネをふんだんに投入できる時代は終わったのだ。そのためには個々のスキルを高めて、「安定」に流されず日々革新を進める意識を持つことが大切だと痛感している。

「違い」だけが強調されがちではあるが、新聞生き残りのためには、組織挙げての取り組みが求められる。組織、場合によっては会社の違いを乗り越えて総合力を発揮できるようにするためには、受け身の発想からの脱出も必要だろう。

経験の差はいかんともし難いが、難解な用語にも少しずつではあるが、なじんできた。人から話を聞き記事にまとめ、それをスピーディーに発信する。制作手段は変わり媒体も多様になったが、基本は同じだ。今まで蓄積してきた紙面づくりの手法は生かせると確信して日々取り組んでいる。

* * *

とはいえ、目的地へ一直線とは、なかなかいくまい。今は迷路を手探りで進んでいるような状態だ。でも、入り組んだ路地も歩き回れば新たな発見もある。緩やかにカーブする小径の風情を楽しめるようになった時、難攻不落と思えた街がほほ笑みかけてくれると期待している。

組織一丸となって

福島民友新聞社

取締役電算編制局長・メディア担当

礪波 道夫

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から約2年2か月が過ぎた5月末、三十数年前の新入社員の時のように、期待や希望、そして一抹の不安を胸に福島市に赴任してきた。



引っ越し直後に送られてきた便箋を開けると、除染に関するお知らせだった。原発事故からの復旧が進んでいない現実がここにはある。市内を散策すると震災の痕跡がまだまだ残っているし、被災者向けの仮設住宅もあちらこちらに見受けられる。県内外への避難者は15万人に及ぶ。一刻も早く復旧・復興が進められることを祈りたい。

* * *

新聞社でのスタートは編集局・機報部。写真部員と取材現場に赴き、写真を本社に電送する取材支援部門や、遠隔地へ新聞紙面を送る紙面電送室での仕事に携わり、印刷工場の受信所での業務も経験した。入社3年目に転機が訪れた。鉛からコンピューターによる新聞制作へという流れに乗って、メーカー研修でプログラム開発やシステムテストの日々を2年間過ごした。大学時代、FORTRAN（フォートラン：IBMが考案した高水準プログラム言語）での数本のプログラム実習の経験しかない私にとっては、毎日が新鮮でワクワクする日々だった。懐かしい思い出だ。

その後も、新聞制作システムの企画、開発に携わり、汎用コンピューターによる紙面制作、サーバー&クライアント時代、ニューメディアへの参入など新聞社の変革期を歩んできた。今では、誰もがパソコン、携帯電話、

タブレット端末を操作できるが、入社当時はコンピューターを扱える人間は限られていた。便利な時代が来たものだ。

* * *

現在の職場が抱えている業務は多岐にわたる。

入力・組版担当は、記事入力や組版作業などの編集支援や写真の画像加工を行う。

システム担当は、①新聞制作システム運用管理②障害対応③全社OA機器管理④本・支社・支局ネットワーク管理⑤外部提供データ処理（通信社、公共機関など）⑥システム更新・構築の検討、提案⑦ビル設備管理サポート（点検、更新の検討・提案、業者依頼・指示など）⑧通信社・メーカー・他社・支社・支局対応⑨DB編集作業⑩地図・表ものなどのイラスト作成作業と自動組を担当する。

メディア担当は、ホームページ、携帯サイト更新作業や配信業務などを行う……。

社内のインフラから運用まで幅広く担当している局で働き始めた。

* * *

社屋から見回すと、西側の奥羽山脈と東側の阿武隈山地に挟まれた盆地。市内からは西に吾妻連峰を、南西に安達太良山を仰ぐ。北東部に残丘（モナドノック）である信夫山がある。朝晩の景色は、四季それぞれに美しく彩られるのだろう。

今はまだ、こうした豊かな自然に親しむ余裕はない。紙面制作に密着した運用支援職場を抱え、緊張の毎日が続く。まずは、少数精鋭の組織作りのため、社員の育成やモチベーションアップへ向けて精いっぱい努力するとともに、新聞業界を取り巻く厳しい環境を乗り越える、強い足腰を全社員といっしょに作っていきたい。皆様には、ご指導、ご鞭撻よろしくお願い致します。

輪転マンとともに

読売新聞大阪本社 執行役員制作局長

植松 実

もう30年近くも前のことになるでしょうか。忘れられない一つの〈光景〉があります。

地方支局の勤務を終え大阪本社の社会部に配属された時のことです。ささやかな特ダネを締め切り間際に出稿し、原稿の「直し」がきちんと反映されているかをチェックするため、デスクとともに向かったフロアでは、作業服のおじさんたちが黙々と働いていました。原稿片手に鉛の活字を巧みに拾い上げ、直し部分を差し替えていきます。1段大に組み上がった版に大きなローラーをかけてゲラを刷り出し、ゴーサインが出ると、版を木植でたたいて紙型と呼ばれる型をとり、地下の印刷工場へ。近寄りたくもありません。ちよっぴり愛嬌もあるおじさんたちの、その無駄のない動き、手際のよさ、自信にあふれた表情……。インキの匂いがプーンと鼻を突く一角で、名人芸、職人の技にうなったものでした。

* * *

入社以来35年、そのほとんどを編集局で過ごしてきましたが、6月に制作局長を拝命した時、真っ先に思い出したのは、遠い昔の、そんな活版部門の光景でした。

今でこそ、新聞社の分散工場は珍しくなくなりましたが、当時輪転機は各社ともたいてい本社ビルの地下に設置されていました。地方から本社に異動するということは「輪転機の上で仕事をする」ということでもあり、編集局の人間にとってそれがひとつのステータスでもあったように思います。

その輪転機を操って毎日ミスなく高品質の新聞を印刷し、販売店に時間通りに届ける—



それが制作局の大きな使命です。実にシンプルな作業です。その当たり前の作業がいかにも難しいか、いかに奥が深いか、そんなことを痛切に感じる着任2か月間です。

毎日決まった時間に新聞が届くのが当然と思っていた素人にとって、驚いたのは輪転機は常におとなしく作動してくれるとは限らないということです。そのトラブルを最小限に食い止めるため、毎日、毎晩、「輪転マン」たちは闘っています。真夜中の呼び出し電話がかかるのは、何も事件担当の新聞記者だけではないことも、恥ずかしながら知りました。全国の新聞社を合わせると輪転機は何百セットにも上るでしょう。少し大げさかもしれませんが、そのひとつ一つに輪転マンらの紡ぐ〈ドラマ〉があるように思います。

「輪転マンの誇り」という言葉も耳にしました。いくら機械化が進んでも、ボタン一つですべて完璧に大量の新聞が刷り上げる時代がくるとは思えません。「立ち上げからいかに早く良紙のレベルに上げ、損紙率を下げるか。それがないと面白くない」。この道40年という輪転マンの言葉が頼もしく感じられます。課題はこうした職人の技、誇りをどう若手に引き継いでいくか。それに尽きます。

* * *

制作局は男性の多い職場ですが、女性社員が耳打ちしてくれたことがあります。「この人は男らしいですよ」。確かに「体育会系」であることは疑う余地がないようです。

わが大阪本社は今も地下に印刷工場があります。ある昼下がり、夕刊印刷の現場をのぞきました。輪転マンたちが刷り上ってくる新聞を手には検紙作業の真っ最中でした。自分が年をとったせいなのか、あの遠い昔のおじさんたちよりは若く見えたのですが、作業服の男たちの目は同じように真剣そのものでした。

シンプルで奥の深い制作局の使命。それを果たすため、「男らしい輪転マンたち」とともに闘っていきたい。そう考えています。

樂事万歳

「あまちゃん」にじえじえじえ！

南日本新聞社 印刷局長

中村 正



私の樂事は朝の連ドラ「あまちゃん」を視ることから始まる。入社前の15分間、見終えた後のスッキリ感がこの上なく痛快になる。「今日も頑張ろう」という気分にしてくれる。ドラマのストーリーは、東京の女子高校生が母親の故郷・北三陸を訪れて海女に憧れ、その後、地元アイドルとして町おこしに一役買うことに…。

主人公・天野アキのフレッシュな笑顔がなんともいい。アキ役は兵庫県生まれの能年玲奈さんが演じているが、東北訛りで演じきっているのも新鮮さを感じる。母親役は小生が若い頃のアイドル・小泉今日子さんが演じている。20年位前にイメージした「キョンキョンがおばちゃんになったら？」と重なり、歯切れの良いセリフが気に入っている。「かけー！」と思う毎日である。時折出てくる回想録には80年代の映像も挿入、初老男の心をつかんでいる。不意打ちの小ネタも満載、思わず含み笑いをしてしまう。時々出てくるアキのじっちゃんや夏ばっばのやりとりも楽しい。1年に10日間しか一緒にいられないというのはわが家では想像もできないが、見ているぶんにはステキだと思う。妻には「夏ばっば」みたいになってほしいと思う。「じえじえじえ！」が今年の流行語大賞になるように応援したい。

* * *

昼間の樂事は「最近、紙面がきれいになったね」と、要人らに声を掛けられるようになったこと。印刷にきて5年が過ぎたが、めっ

たに聞くことはなかったので素直に嬉しい。自身も現職に就くまでは「新聞は普通に印刷できて当たり前」と考えていたが、現場の苦勞や努力の積み重ねにより今日の紙面品質があることを痛感するようになった。着任時のころ見当ずれなどを指摘すると「ある程度の紙面を時間内に印刷できればよい……これ以上の質を求めるのであれば設備を変えろ」と揶揄されたこともあった。それでも流されなかった。毎朝、「見当」や「再現性」を評価し、悪いものは改善・努力するように注意し続けてきた。現場の技術で改善されなければ関連メーカーさんへも助言や改良を求めた。その効果は徐々に現れ、「きれいになったね」につながっている。今後も「品質アップ」にこだわりたい。

* * *

休日の樂事はゴルフ。印刷への配属を機会にゴルフを始めた。前任者から「ゴルフも業務のうち？」と半強制的な勧めを受け入れたのがきっかけ。道具を買い揃えて週1回のレッスンに通い始めた。クラブを握ったこともなかったもので、まさに5カ月間は「55歳の手習子」だった。クラブの握り方から教わり、7番アイアンで素振りの後に約100球を打てるのみのカリキュラムが2カ月間続いた。ドライバーを握れるようになったのは3カ月目に入ってから。しかも一日10分程度。さらに師匠の厳しい教えは「練習場にはひとりで行くな！」だった。レッスン期間中はストレスが相当溜まった。その甲斐あってかデビュー時のスコアは122。その後116、106と順調に伸びたが100切りには1年掛かり、90切りはさらに2年を費やし、ゴルフの難しさを修得した。嫌々始めたゴルフだったが、今ではすっかりはまり、あちこちのコンペで賞品をいただけるようになった。継続は力なり。これからは「7番アイアンの素振り」は欠かさないようにしたい。

50 過ぎからのフルマラソン挑戦

(株)ゴスグラフィックシステムズジャパン
営業部長

中村 英之

ゴスに入社して早32年 設計に15年、営業に17年関わって50半ばにそろそろ差しかかるうかという今日この頃です。

営業に移ってから海外担当として中国、韓国、台湾を主に廻り数多くの宴会に参加、52kgだった体重が15年で85kgまで増加。これではいけないと一念発起して、2010年2月から1日30分のウォーキングを開始。6月ぐらゐからウォーキングで物足らず、ジョギングを始めるも第1日目は1kmも走れず玉砕。これに懲りずに半年かけてゆっくりと距離を伸ばし2010年末には何とか5km走れるようになりました。この頃には順調に体重も減り75kgまで減量出来ました。ちなみに現在は65kgです。

* * *

無謀にも2011年1月に谷川真理ハーフマラソン大会に出場し1時間50分38秒で完走。10km過ぎからの地獄の苦しみが今でも思い起こされます。さらに懲りずに同年2月に45回青梅マラソン30kmに参加し、3時間5分0秒で完走。レース中は辛くて、歩きたい一心でしたが、沿道の声援に後押しされて何とかゴールまで行き着いた時の達成感は、今でも忘れません。

そして同年3月にフルマラソンにエントリーしましたが、3月11日に発生した東北大地震の影響で大会は中止になり、フルマラソンは1年お預けとなりました。

2012年2月の46回青梅マラソン(3:01:31)の後、同年6月いよいよ初フルマラソンとなる東京喜多マラソンに参加、4時間12分51秒で完走しました。しかし30kmを超えてからは辛くて何回か歩いてしまった事と目標の4時間切りが果たせなかったのが悔しくてレー

ス後はほぼ毎日10km以上走るようになりました。

そして2013年2月に47回青梅マラソン(2:45:15)に参加した後、3月24日に開催された古河はなももマラソン大会で3時間37分16秒とサブ4達成、初マラソンから一気に30分も短縮できたのには自分でも驚きました。でも30km越えの壁は厚く、歩きはしなかったものの6分/kmまでスローダウンせざるを得なかったのが残念でした。次は3時間半切りを目指すのと100kmウルトラマラソンに参加する事を目標に日々トレーニングを続けていきたいと思います。

* * *

最近では東京マラソンや大阪マラソンなど有名大会にエントリーするのは、くじ運が無いと参加出来ません。それだけマラソンがブームになってきているのだと思います。

健康維持の為に始めましたが、ディープなマラソンの世界にどっぷりと浸かってしまい新たな目標を目指して老体に鞭打って挑戦を続けて行きたいと思います。もちろん国内外問わず出張先での観光ラン(各地の名所をランニングしながら廻ります。)も今後の楽しみの一つになりました。

皆さんもぜひラントモになりませんか？



食べ物の色にも DIC !

アイスやゼリー、ミント系などのガム、カラフルにコーティングされたチョコレートなど、普段口にする鮮やかな食品の水色。DICは食品メーカー向けに植物由来の青色色素を提供しています。食品に使われる青色色素にはいくつかの種類がありますが、植物由来でしかも鮮やかな青が出せるのはDICの青色色素だけ。合成色素のように食べると舌が染まったりすることのない、安心して食べられる青なのです。例えば人気のアイスクャンディー。ソーダ味の氷菓のほとんどにDICの青色色素が使用されています。いま世界では、食品の着色料を人工着色料から天然色素へと切替える動きが急速に広がっており、DICは食品向け青色色素で、圧倒的なシェアを獲得しています。この青色色素、名前は「リナブルー」

といいます。「ブルー」は「青」ですが、「リナ」は、「スピルリナ」という藻の名前から来ています。緑の藻から採れた青色色素、それがリナブルーなのです。スピルリナは、ビタミン、ミネラル、たんぱく質、食物繊維など50種以上もの健康・栄養成分をバランス良く含んでいる理想的な食材とされています。

DICグループでは、スピルリナ発見の地であるアフリカを対象とした飢餓・栄養不良改善活動「スピルリナプロジェクト」を支援しています。また過去には、1991年にチェルノブイリ原発事故で被災した子供たちに、1993年にボスニア難民への支援としてクロアチアの病院に、また東日本大震災の際には宮城県および福島県薬剤師会を通じて東北地方の方々に、スピルリナを無償で提供しています。

今後もDICは、様々な形で社会貢献活動を進めて参ります。



DICグラフィックス株式会社

変わらぬ「顧客第一」の精神で

私ども東京機械製作所は、去る6月1日付で組織改革を行い、事業部制を導入致しました。この目的は、各事業部の役割を明確化して業務の効率化を図り、これをお客様へのサービス向上に繋げるといふものです。

これにより、お客様の窓口である、いわゆる「営業部」は「第一事業部」と「第二事業部」に分割され、新たな陣容にて業務を開始致しました。

「第一事業部」には「オフ輪事業グループ」と「サービス事業グループ」を置き、従来通り、輪転機の拡販およびメンテナンス・サービスを展開して参ります。現在、新聞用大型輪転機で200セット余り、半裁輪転機や商業輪転機をあわせると、300セット余りの弊社製輪転機が、お客様のもとで日夜稼働しています。

お客様にとって現在の命題である「輪転機の延命化」に向け、有効有益な提案をして参ります。

また、「第二事業部」には「デジタル事業グループ」「提携販売事業グループ」「エネルギー事業グループ」を置き、いわゆる新規事業の育成に従事して参ります。この「第二事業部」では、今春、日本新聞協会様より栄誉ある「技術開発賞」を受賞致しました「ジェットリーダー1500」の拡販も担当させていただきます。

組織変更により名称は変わりましたが、変わらぬ「顧客第一」の精神により、私どもは今後ともお客様の輪転機の安定稼働のため、全力で尽くして参ります。安定した新聞発行と、印刷物生産のお手伝いをさせて頂くことが、私ども東京機械製作所の使命です。今後ともご指導ご鞭撻頂きますようお願い申し上げます。

TKS 株式会社 **東京機械製作所**
SINCE 1874

「エコロジー効果」のCTP版

岡本化学工業は、新聞用CTP・サーマルCTP・ケミカルレスをキーワードとしていますが、次世代のCTPとして相変換、機上現像、ケミカルレスが上げられます。究極的新闻用CTPを考えた時、完全ケミカルフリー・現像フリーですが、実用化についてはまだまだ先の話です。

次に輪転機上で現像可能な機上現像が考えられますが、再現性と耐刷性の両立、検版性および網点の管理、機上現像されたケミカル処理、レーザー照射後印刷機上での現像までのフィンガーマークや保存性などの解決すべき問題が山積しています。

そこで弊社としては、現在使用されている新聞用ネガサーマルCTPの基本性能の継承と環境負荷低減の両立を求めた結果、処理シ

ステムの合理化、省廃液を通じた環境負荷の低減を開発の主眼とし、CTPの製造にあたっては以下の基本性能としました。

3つの「エコロジー効果」

- 資材コストの低減
低pHガム1液処理、現像液不要
- 廃液処理コストの削減
新規設備不要
- 環境負荷の低減
廃液量を5分の1以下に低減

この基本仕様を掲げ研究開発を行ったものが、低アルカリ低量1液処理型CTP「DTN-1」です。岡本化学は新聞社のお役にたつよう全力を尽くす所存です。

今後とも皆様の変わらぬご指導ご鞭撻を賜ります様何卒よろしくお願ひ申し上げます。



岡本化学工業(株)

80周年を迎えたニッコールレンズ

ニコンの写真用レンズ「ニッコール」は、本年、発売から80周年を迎えました。「NIKKOR」の歴史は、1932年に商標登録を行い、1933年に航空写真用レンズを「Aero-Nikkor (エアロニッコール)」と名付けて初めて販売したことに始まります。その後1959年に一眼レフカメラ「ニコン F」を発売し、同時に発売されたレンズに採用された「ニコン Fマウント」は、機械的な形状を変更することなく、最新のデジタル一眼レフカメラにも引き継がれています。

これまでニッコールは、半導体露光装置の開発過程で生み出された高い反射防止効果を発揮する「ナノクリスタルコート」、手ブレを効果的に補正する「VR」機構などの最先端テクノロジーを活かしていますが、とりわけ近

年のデジタル化、デジタルカメラの高画素化に対応する為、光学性能は飛躍的な進化を遂げました。どんなに優れたカメラも、その性能を引き出してよい写真を撮る為に、優れた光学性能をもったレンズが欠かせません。ニコンでは、開発設計から製品化に至るまで、高水準規格の管理により、お客様の厳しいご要望に応じてまいりました。

今年は、スポーツ、報道の現場の方々のご要望が強かった焦点距離800mmの超望遠レンズ「AF-S NIKKOR 800mm f/5.6E FL ED VR」も発売しており、まさにニッコールを象徴するレンズの一つとなっています。

2013年6月中旬にはレンズ交換式カメラ用のニッコールレンズの累計生産本数は8,000万本を達成しました。今後もおお客様の期待を上回る高品質で魅力的な製品の開発、市場投入に努めてまいります。



(株)ニコン



原哲夫前CONPT会長死去

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)前会長の原哲夫氏が、7月30日病気のため死去した。76歳だった。初代岡村雄一会長の死去にともない、2001年5月の第27回定時総会で第2代会長に選出、03年5月まで懇話会会長。告別式は8月4日に執り行われた。喪主は次女の杉山恭子さん。

原哲夫氏略歴

1936年神奈川県生まれ。59年慶応義塾大学工学部卒、沖電気工業入社、66年日本ソフトウェア入社。72年日本システム技術設立に参画、取締役営業部長、96年社長、02年会長を経て04年相談役。その間01年～03年CONPT会長のほか、日本新聞教育文化財団評議員を務めた。

原哲夫前 CONPT 会長を悼む

新聞技術の変革期をリード

日本新聞製作技術懇話会 会長 芝 則之

うだるような猛暑日が続く7月30日、当CONPT（日本新聞製作技術懇話会）前会長原哲夫氏がお亡くなりになった。体調を崩されていると聞いてはいたが、76歳は鬼籍に入るにはまだまだ惜しいお歳である。

氏は2001年4月に78歳で逝去された岡村雄一初代会長の後任として、同年の翌5月第27回定時総会で第2代会長に就任した。岡村氏が26年間の長きにわたって会長を務め、強烈な個性でCONPTの創業と礎作りに心血を注いだ後を引き継いだものである。在任2年は短かったとはいえ、その間は文字通り多事多端であった。氏は日本システム技術株式会社社長職の傍らCONPTを束ね、「守成は創業より難し」という古言を身をもって味わいご苦労したと推察する。

* * *

氏の会長在任当時を少々振り返ってみる。2001年9月11日に米国同時多発テロが発生、さらに90年代の産業景気をリードしてきたITバブルの崩壊と続き、その余波で世界経済の低迷はもとより、日本経済はデフレスパイラルの逆風下にあった。新聞界では本格的なマルチメディア時代に入り、新聞製作技術業界が新聞社のシステム・機器づくりにどう

応えるか問われる時でもあった。12年後の現在でこそインターネット、電子新聞、上流下流のデジタル化、クラウドコンピューティング、高速オフセット輪転機など、製作工程でも当たり前になっているが、先行きの不透明な当時は会員各社ともども試行錯誤と不安の連続だった。また中流工程ではCTPがようやく各新聞社の導入対象になりつつあり、製作工程の新たな合理化が始まろうとしていた。



2003年JANPSでの原氏（前列左から2人目）

そんななか、氏の在任中にJANPS（新聞製作技術展）は2001年1回だけであった。第16回の統一テーマは「環境と人と技術の調和」で、「環境」に意を払った技術展を主導された。会長を退かれた後の続く2003年第17回も「未来をひらく技術と創造—環境にやさしい新聞づくりへとつながった。新聞製作技術業界が環境重視のトレンドをとらえ、新たな道を開

こうとするさきがけでもあった。

当時、景気低迷とテロによる海外旅行不安はCONPTの活動にも影を落としていた。重要行事CONPT-TOURの開催も危ぶまれるほどだったという。だが在任中01年(英独米訪問)、02年(米加訪問)の2度のツアー実施にこぎつけられた。その陰には会長としての尽力もあったに違いない。

* * *

私はちょうど10年前の5月に第3代会長職を原氏から受け継いだ。1993年からといわれる日本経済の“失われた20年”と否応なく向き合ってきている。しかしアベノミクスの効果と

評価はさて置いて、ようやく企業の景況感に明るさも見え始めてきた。ご苦労なされた原前会長がこの時逝去されてしまった。せめて存命中に今後の日本経済の回復と新聞界の復調する姿をご覧に入れたかったと思う。と同時にCONPTがなお一層しっかり新聞製作技術を支えて行かなければならないとの思いを新たにしている。

会長就任までCONPTの活動と縁がなく、故人と親しく酒を酌み交わすことも、またかなりの腕前といわれたゴルフを一緒にする機会もなかったのが残念である。温顔の前会長原哲夫氏の逝去を心から悼むものである。

にじみ出た心 温まるお人柄

日本新聞協会 顧問 鳥居 元吉

ご自身の年間のハイライトが克明に書かれている原さんの年賀状が、今年は白紙のまま届いた。何かあったのだろうか、と気にかかっていた。今年六月の新聞協会の総会で役員を退任したら、原さんに連絡をとり、ゴルフを楽しもうと思っていた矢先、訃報に接した。

* * *

同じ小金井市住まいで、原さんは小金井ゴルフ協会という市民なら誰でも入れるゴルフ会の世話役を引き受けていらしたのだ。

原さんに初めてお会いしたのは、20年余も前のことだと思うが、とりわけ密接だったのは、岡村元会長のあと原さんが会長を継がれてからの数年間、私が編集制作部長となり、またCONPTとお付き合いが再開されてからである。

JANPSのあり方を巡って、技術委員会の注文が色々出てきて、調整に随分と神経を遣われた。中には私も首をかしげざるを得ないような意見もあった。そんな中で原さんは、ていねいに耳を傾けられていた。

そんな折、CONPTとの会合のあとだった

か、ホテル・ニューオータニの会員制クラブに何度か連れて行っていただいた。どういう話をしたのか、今では茫漠としているが、静かにBGMが流れる中で、ひとときを過ごさせてもらった。

私が新聞協会の理事・事務局長に就任した時も、いち早くお便りをいただいた。気恥かしくなるような評価も書かれていたが、原さんのお人柄がにじみ出た心温まる祝辞で、本音を言うと、この上ないうれしさがこみ上げてきたのを今も忘れない。

* * *

平成21年の賀状は「昨年も無病とは参りませんが……70回を超すラウンドでした」、22年は「十月に南フランスを訪ね……」、23年は「北欧4か国を巡り……」とあって、24年は「前半は入退院の繰り返し、後半は家の建て替え、少しはゴルフを楽しめるところまで回復」と記されていた。そして今年は、白紙の賀状だった。

乗り換え駅の丸ノ内線四ツ谷駅のホームでよくお見かけした姿が目に焼きついている。あの端正なたたずまい、お姿を思い出しつつ、感謝を込めて。原さん安らかに。合掌。

一喝の記憶、私の行動原理

株インテック

NSG事業部メディアソリューションセンター
営業部長 林 克美

原さんには29年以上もお世話になりました。初めて話をしたのは、私が入社した年の冬、刈谷駅からお客さまの会社までにある地下道でした。当時、名古屋支社勤務の私は、役員で東京本社営業部長である原さんにお会いする機会はほとんどありませんでした。私が「もしかして…」と頭を下げた瞬間に、「ご苦勞さん！」と声をかけていただきました。私は驚くと共に凄く感激したことを今も覚えています。後年、この事について「顔は覚えてなかったが、なんとなく判った」と教えていただいたのですが、あの瞬間から原さんを尊敬するようになりました。

仲人もお願いしました。一度は奥様の体調が優れないという理由で断られましたのですが、数日後に「最後の仲人にする」と了解いただきました。ご自宅に伺って御礼を申し上げると、奥様は「断ると主人を支えていただく人をなくすことになると思った」と話されました。このように原さん夫妻はお互いを気遣い、仲睦まじい理想の夫婦でした。私は、家庭に関しても、原さんのようでありたいと思っています。

* * *

原さんとの縁と言えば、懇話会においても様々なものを感じます。「原さんのところの」と枕詞をつけてご紹介いただくと、初対面の方でも親しくしていただけるようになります。また、何度となくコンプトツアーに参加させていただいていますが、これは原さんがCTPを推進したことに端を発します。当時の提携先(オートロジック社)の営業会議がNEXPO展で開催されるため、担当となった私が渡米しました。同時に、コンプトツアーの方々へのNEXPOブースでの説明員も務め

ました。この時から海外新聞業界の技術動向に興味を持ち続けて、現在は企画委員会副委員長でツアー計画にも関与させていただくようになりました。今でこそ、少しは上達できたと思いますが、当時は英会話が苦手でした。そのために「英会話教室に行く費用を会社で出してほしい」とお願いしたところ、「自分でやりたいと思ったことを他人に頼ってやるものとするな。苦勞してやるのが大切だ」と一喝されました。思い返すと、叱られた記憶は、それだけです。その後、この教えを自らの行動原理として、海外展示会視察を続け、NAAとIFRAが行った広告データの世界標準化への参加など、自らの望むことを実現することに努めています。

* * *

原さんと最後にゴルフをした日が、私が原さんに会った最後の日になりました。病の症状が軽くなったと誘っていただいた日でした。原さんはゴルフが上手く、私は全く足元にも及びませんでした。その日は、調子が出ないままハーフを終えて、私とも一打差でした。しかし、昼食後の最初のティーショットは、以前のような強い気魄を感じさせました。その後は病の影響を感じさせないプレーでした。あの姿も私はハッキリと覚えています。

原さんの通夜は、奇しくも原さんが創立に関わった日本システム技術の41回目の創立記念日に行われました。原さんにお世話になった社員の多くは、定年退職などの理由により日々を別の場所で過ごしています。その仲間と再会することが出来ました。それは創立記念日の業後に開催していたパーティーのようでした。原さんは最後まで仲間を気にかけてくださったのだと思います。ここまで導いていただいた事に対して深く感謝したいと思います。本当にありがとうございます。ご冥福をお祈りいたします。

第37回国内研修会記

▶高知新聞まほろばセンター見学会◀

6月21日、高知新聞まほろばセンターにて第37回国内研修会が開催された。事務局2名を含む総勢22名が参加した。

同センターは高知県南国市に高知新聞社の新印刷センターとして建設され平成24年9月より稼働している。「まほろば」とは「優れた良い所」という意味の古語で、かつて土佐の国府があった南国市比江に近いことから歴史的イメージを重ねて名付けられたとのこと。その名の通り地盤が強く標高約48メートルの高台に建設され、災害時には外部支援無しで約1週間の新聞発行が可能な自家発電装置などを備えており「災害に強い印刷工場」となっている。

三菱重工印刷紙工機械製4×1輪転機、パナソニック製CTP、椿本製AGV、西研G製キャリア、ストラパック製カウンタースタッカー等省エネ・高品質に優れた最新鋭の設備で構成されている。

センター見学においては株式会社高知新聞総合印刷代表取締役社長 崎山様、同新聞印刷本部長 山崎様よりセンター全般の御説明を頂き夕刊印刷を見学させて頂いた。センター内には自家発電機に加え、取材車両や配送車両用の給油設備があり参加者の目を引いたとともに災害に対する高知新聞社の意識の高さを感じた。

また、工場内に設けられた「高知新聞ふれあいミュージアム」は高知新聞の報道の歴史



や新聞印刷技術の変遷をパネル展示し、大型新聞パネルを用いて新聞の読み方や豆知識をゲーム感覚で学ぶことができるなど工場見学者にとって大変魅力的な施設だと感じた。

見学後の懇親会は崎山様、山崎様、高知新聞社から取締役総務局長兼印刷管理室長 村田様もご参加頂き親睦を深めさせて頂きました。土佐の郷土料理とともに伝統的なお座敷文化にも触れることが出来、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。

お世話になりました村田様、崎山様、山崎様、工場関係者の皆様には心より御礼申し上げます。

(清水製作(株) 清水英則記)

新着資料

(国内)

- * 日本新聞協会“NIEニュース”第72号
“NSK経営リポート”夏号、“新聞広告報”753号
“脳から見た新聞広告Ⅱ”“新聞技術”No.224、“平成24年度日本新聞協会の活動”

- * 三菱重工業“三菱重工グラフ”172
- * 日本アイ・ビー・エム“無限大”No.133

(海外)

- * WAN-IFRA “IFRA Magazine”7月号

お知らせ

CONPT TOUR2013視察報告会を11月1日(金)午後3時30分から、日本記者クラブ・大会議室にて開催いたします。

詳細は、10月上旬ホームページにてお知らせします。多くの方のご参加をお待ちしております。

訂正

7月号・14ページ「会員消息・所在地変更」で、東洋インキ(株)住所に誤りがありました。お詫びして訂正します。

(誤)中央区京橋2-7-9

(正)中央区京橋2-7-19

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (42社) 平成25年9月現在

社 名	〒番号	所 在 地	連 絡 先
株インテック	136-8637	東京都江東区新砂1-3-3	03-5665-5097
NECエンジニアリング(株)	270-1198	千葉県我孫子市日の出1131	04-7185-7614
岡本化学工業(株)	335-0004	埼玉県蕨市中央2-6-4	048-431-4816
株加貫ローラ製作所	544-0005	大阪府大阪市生野区中川5-3-13	06-6751-1121
株KKS	555-0011	大阪府大阪市西淀川区竹島4-11-54	06-6471-7771
株金陽社	141-0032	東京都品川区大崎1-2-2 アートヴィレッジ大崎セントラルタワー6階	03-5745-6223
クォード・テック・インク日本支店	336-0034	埼玉県さいたま市南区内谷3-11-26	048-839-8831
コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)	103-0023	東京都中央区日本橋本町1丁目5番4号 コニカミノルタ日本橋ビル	03-5205-7820
コダック(株)	101-0062	東京都千代田区神田駿河台2-9 KDX御茶ノ水ビル	03-5577-1200
株ゴス グラフィック システムズ ジャパン	350-1328	埼玉県狭山市広瀬台2-5-15	04-2954-1141
サカタインクス(株)	112-0004	東京都文京区後楽1-4-25 日教販ビル	03-5689-6666
清水製作(株)	108-0023	東京都港区芝浦3-17-10	03-3451-1261
ストラパック(株)	221-0864	神奈川県横浜市神奈川区菅田町2800	045-475-7229
西研グラフィックス(株)	110-0016	東京都台東区台東4-29-15 上野永谷タウンプラザ213	03-5812-3681
第一工業(株)	335-0002	埼玉県蕨市塚越7-2-8	048-441-3660
DICグラフィックス(株)	101-0063	東京都千代田区神田淡路町2-101 ワテラストワー7F	03-6733-5067
田中電気(株)	101-0021	東京都千代田区外神田1-15-13	03-3253-2816
椿本興業(株)	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6718-0151
株椿本チエイン	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6703-8402
東京インキ(株)	114-0002	東京都北区王子1-12-4 TIC王子ビル	03-5902-7651
株東京機械製作所	108-8375	東京都港区芝5-26-24	03-3451-8172
東芝ソリューション(株)	105-6691	東京都港区芝浦1-1-1	03-3457-4410
東洋インキ(株)	104-8378	東京都中央区京橋2-7-19 京橋イーストビル8・9F	03-3272-0721
東洋電機(株)	480-0393	愛知県春日井市神屋町字引沢1-39	0568-88-6401
東和電気工業(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6F	03-6222-5005
株ニコン	100-8331	東京都千代田区有楽町1丁目12番1号 新有楽町ビル	03-3216-2065
ニッカ(株)	174-8642	東京都板橋区前野町2-14-2	03-3558-7861
日本アイ・ビー・エム(株)	103-0015	東京都中央区日本橋箱崎町19-21	050-3150-0738
日本新聞インキ(株)	108-0075	東京都港区港南1-8-27	03-3450-5811
日本電気(株)	105-8540	東京都港区芝3-23-1 セレスティン芝三井ビル	03-5476-4656
日本ボールドウィン(株)	108-0023	東京都港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階	03-5418-6121
パナソニックシステムネットワークス(株)	224-8539	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地	045-938-1613
株日立製作所	140-8573	東京都品川区南大井六丁目27番18号	03-3763-2411
富士フイルムグローバルグラフィックスシステムズ(株)	106-0031	東京都港区西麻布2-26-30富士フイルム西麻布ビル	03-6419-0421
富士通(株)	105-7123	東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター	03-6252-2625
富士薬品工業(株)	176-0012	東京都練馬区豊玉北3-14-10	03-3557-6201
方正(株)	140-0014	東京都品川区大井1-24-5 大井町センタービル	03-5746-2651
ボッシュ・レックスロス(株) サーボシステム事業部	150-0002	東京都渋谷区渋谷3-6-7 ボッシュビル3階	03-5485-7240
三菱重工印刷紙工機械(株)	144-0033	東京都大田区東糞谷4-6-32	03-3744-2951
三菱製紙(株)	130-0026	東京都墨田区両国2-10-14両国シティコア	03-5600-1475
ミューラー・マルチニジャパン(株)	174-0042	東京都板橋区東坂下2-5-14	03-3558-3131
明和ゴム工業(株)	146-0092	東京都大田区下丸子2-27-20	03-3759-4621